教育を読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

『三四郎』

夏目　漱石 著
新潮文庫
定価 340 円＋税

三四郎は、熊本の高等学校（旧制）を卒業して、大学（東京大学）文科に入るため汽車で上京する。

明治の汽車である。日が暮れると「駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の点いた洋燈を挿し込んで行く」

車中で髭のある人と隣合わせになり水蜜桃をご馳走になる。

東京ではちんちん電車に驚く。どこまで行っても東京がなくならないことに驚く。

大学は九月十一日に始まる予定だが、行っても誰もいない。事務員に聞くと「先生が居ないからだ」という。大学の池のほとりにしゃがんでいると、頭に真っ白な薔薇を挿した女に出会う。

十日後にやっと授業が始まる。授業中に、隣で先生の似顔絵のポンチ画を描いていた学生にカレーをご馳走になる。佐々木与次郎。与次郎が居候をしている「先生」の家に連れていかれる。先生は上京の車中で同席した、髭のある人であった。高等学校の英語教師で広田先生という。

三四郎は広田先生の家に出入りするようになる。先生の家に来ると、三四郎はなぜか呑気になれる。先生は絶えず煙草を呑む。佐々木与次郎はこれを評して、鼻から哲学の烟を吐くと言った。

佐々木与次郎は先生に私淑し、大学教授に押し上げるため「偉大なる暗闇」なる論文を書き上げる。「先生は十年一日の如く高等学校に教鞭を執って薄給と無名に甘んじている。然し真正の学者である」

先生の家で池の女に会う。サンドウイッチが沢山入った籃を持ってきている。里見美禰子。「風が女を包んだ。女は秋の中に立っている」

秋が深まり、広田先生、美禰子、三四郎たちは菊人形を見にいく。人ごみ、道端の乞食、迷子。美禰子と三四郎は皆とはぐれて二人になる。

「空の色が濁りました」と美禰子がいった。「迷子の英訳を知っていらしって」

「迷える子ー解って？」

その時三四郎はこの女にはとても叶わないような気が何処かでした。

街を楽隊が行く。天井で鼠が騒ぐ。

明治の青春である。ご一読を。